

道 徳 委 員 会

1 研究テーマ

子どもの心を揺さぶり、より豊かな道徳的価値に気づかせる道徳の授業はどうあったらよいか

2 研究課題

「体験を生かした、心に響く道徳教育のあり方」というテーマのもと4年が経過し、「体験を生かす道徳の授業」の重要性がさらに強く確認された。その良さを生かしながら、1時間1時間の道徳の学習の時間の充実を願って、研究テーマを今年度変更した。そして、昨年度までの成果と課題をもとに次のように今年度の重点を決めだし、須坂小学校で実践していただいた。

心に響く道徳の授業にするために、更に子どもの心を揺さぶる資料についての研究を深めていく。(モラルジレンマ的な資料の研究)

資料の角度づけをするために1時間の授業での発問が重要になってくる。押しつけがなく、児童の内面を引き出していくための発問の研究を深めていく。児童の内面の質的变化をどうとらえるかということは、授業における児童の変容の姿の評価とも関わってくる。中心発問や補助発問と関わった1時間の授業の展開の工夫についての研究を深めていく。

子どもによる授業評価・道徳の時間の自己評価については、スタートしたばかりなので、検討を重ね、継続した中で見えてきたものを明らかにしていく。

3 指導の実際

< 研究授業実施 >

平成19年11月7日(水) 須坂市立須坂小学校 6年竹組 田原 裕子教諭

子どもたちの実態にあった資料を用意すること

道徳の授業において「あるべき姿(正論)」に抵抗なく流れがちな子どもたちに対して、そうした思いや考えを揺さぶるような資料や、より身近な話題の資料を提示することを意識して取り組んできた。資料によって間接的な体験を仕組むようにし、登場人物について語ることで、子どもの生き方やその発言の根拠になっている道徳性が出てくると考えた。その中で、葛藤場面を含んだモラルジレンマ的な資料を中心的に扱うことの研究を進めてきた。

本時では、資料として「手品師」を扱い、1-(4)誠実に、明るい心で生活する。と1-(2)より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけない努力をする。という2つの価値の葛藤場面を考えて授業を実施した。しかし、「手品師」は本来「誠実」の良さが出ている資料であったので、逆に資料のもっている価値を生かし切ることができなかったのではないかという反省が残ってしまった。

子どもたちの心を揺さぶる授業展開のあり方

あるべき価値(正論)を述べるにとどまってしまう、なかなか本音を述べるのが苦手であった竹組の子どもたちであったが、6年生としての成長と多様な価値や考え方に触れることができる道徳の学習を根気強く、繰り返し行うことによって、昨年や1学期の初めの頃に比べて、子どもの発言や考え方にも変化が見られてきた。道徳の時間においても、お互いの思いをぶつけ合う場面が見られるようになった。

また、子どもが自らを見つめ、子ども自身の判断力を高めたいと願い、本時でも「もし自分が手品師だったら」という発問にこだわってみた。

「自分が…」ということで、真剣に自分と向き合う児童の姿が多く見られた。自分自身の問題として、真剣に考え、お互いにより高まっていこうとする姿が見られた。しかし、「自分だったらどうか」という形の中心発問については、疑問を投げかける声が多かった。中心発問は、より価値の自覚を深めていくための手だてだったことを考えると、工夫していきたい。また、「6年竹組の子どもたちだからできた授業であった。」という感想をもたれた出席者も多かったように感じている。実は、そこに授業者及び須坂小学校の願いとこだわりが強くあった。教育課程とは違った郡研の良さを生かしたい。普段の道徳の授業では、なかなかできないことにチャレンジしてみたいと考えられた取り組みでもあった。

道徳の授業の評価について

1時間の授業で、子どもの道徳性はどう育ったか。ということが評価の観点になる。一人ひとりの子どもが、登場人物の心情や判断力にふれながら、考えていく力をどう伸ばしてきたのかを教師が評価することが、教師の授業改善にもつながり、また子どもの道徳的な価値を深めていくことにつながっていくと考えたい。

今年度は、評価については十分に研究を深めることができなかった。お詫び申し上げたい。

4 この事例からあきらかになったこと

子どもたちが正論であると思っている考えを揺さぶるような資料や、より身近な話題の資料を提示することを意識して取り組みたいと考えるが、実際なかなか子どもの実態にあった資料を見つけることは難しい。指導者の宮入先生からも子どもの実態に合う資料というものはほとんどないと考えたほうがよいとのご指摘も受けた。資料によって間接的な体験を仕組むようにし、登場人物について語ることで、子どもの生き方やその発言の根拠になっている道徳性が出てくる。

資料のもっている価値を大切にしたい授業を行っていく大切さを再認識することができたように感じる。しかし、一方で、モラルジレンマ的な資料を数多く扱ってきたことで、なかなか自分の本音を語るができなかったり、あるべき正論にとどまりがちだった6年竹組の児童の成長が見られたことも事実であった。

登場人物と自分を重ね、迷ってしまっている子どもの揺れている心や気持ちに焦点をあてていくことの大切さを改めて感じることができた。そのためにも、子どもたちからでてきた言葉を使って返していくことが、教師の大切な支援のポイントであり、そのことが道徳的な価値を深めていくことにつながっていくことになることを確認しあうことができた。本時でも、例えば「小さな約束でも約束は約束」という児童の発言を位置づけ、全体に投げかけてみたかった。

指導者の宮入先生から1時間1時間の普段の授業の中でできる資料分析の方法について、実際の実践を通してご指導していただくことができた。

5 来年度への課題

- ここ数年、読みきかせの手法が続いているが、様々な形の資料提示の仕方の研究を深めていきたい。
- 児童・生徒の内面を引き出していくための発問の工夫については、引き続き研究を深めていきたい。
- 郡研としての授業評価はまだスタートしたばかりで、今年度十分行えなかったもので、高学年用、中学生用と検討を重ねていきたい。